
肝っ玉お嬢様奮闘記

相神 透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

肝っ玉お嬢様奮闘記

【Nコード】

N9438X

【作者名】

相神 透

【あらすじ】

病死したベテラン看護婦が、異世界に転生して奮闘する話。

↳ 転生↳ (前書き)

とりあえず始めてみました。走りながらストーリーを考えていきます。

↳ 転生

・・・もう、死ぬ覚悟は出来ていた。何か月も病院のベッドに縛り付けられているのだ。病室の窓から見える季節はすでに一巡し、二回目の秋を迎えようとしている。何か月も前に、自分の病気が不治のものであることも、進行し続けていることも、説明を受けている。だからもう、死ぬことは怖くはない。いや、怖くないと思っていた。

自分だけのことならば充分生きたといえるかもしれない。平均寿命にはまだまだあるとはいえ、50年も生き、看護師として働き、そして医師の夫と結婚し、二人のこどもにも恵まれた。夫と二人で多くの命を救ったし、多くの命を見送った。充実した人生だったと思う。ただ、この子たちを残していくことだけが心残りだけれども、二人とも、もう成人しているのだ、私が子離れできていないだけなのかもしれない。

ただ、それでもまだ生きたい、生き続けたい。夫や子どもと一緒に時間を過ごしたい。笑い合いたい。抱き合いたい。そう願ってしまう。願っても叶わないし、願うだけつらくなるだけなのに。

ああ、そろそろ終わりだ。体から力が抜けていくのがわかる。呼びかける家族の声が遠くなる。ああ、最後までいは笑いかけてほしい。笑顔を見せほしい。私も笑顔で、逝くから、笑顔を覚えておいてほしいから。さようなら子供たち、さようならあなた、さようなら・・・

「ご臨終です」

医師のその声は、私には届かなかった。

目が、覚めた。覚めるはずがないのに。ゆっくり開いた眼には白く柔らかな光が差し込んでくる。生き、てる、のか。まだ生きられるのだろうか。また、笑いあえるのだろうか。狂おしい希望が胸に湧き、感情がほとばしる。衝動的に声を張り上げた。

「おぎゃあ、おぎゃあ、ぎゃあああああ」

私の喉からでたのは赤ん坊の泣き声。

・・・そのあと、私が事態を把握し、納得するまでには長い時間が必要だった。

どうやら、私は生まれ変わったらしい。まだきちんとは開けることもできない目を、一生懸命に開いて見えてくる世界の端に、たまに映り込む自分の手は、どう見ても赤ん坊の小さな手だ。細くて、小さな指がピンク色の丸々とした手のひらから伸びている。それは自分の手のはずなのだが、小さくてかわいらしくて、息子や娘の子供のころを思い出す。

思わず笑みが浮かぶ。笑みが浮かぶだけではなく、キヤツキヤツと声が出て、手足をバタバタして喜びを全身で表してしまうのは、赤ん坊の本能的な反応なのだろうか、ちょっと制御できない。

「あーらマーヤちゃん、ご機嫌ねえ、どうしましたかあ」

私の名前はマーヤと言うらしい。愛称かもしれないが。その名前が優しく話しかけてくれるのは、おそらく今世の母なのだろう。やわらかい声が耳に優しい。まだ焦点が合わない目では、母のはつきりとした容姿はわからないのだが、どうやらコーカソイドのように見える。

キリスト教圏でも転生つてあるのかな、などと思った理由は、言葉だ。残念ながら日本語ではなかったのだが、まったく知らない言語でもない。ところどころ知らない単語が出てくるのだが、私の知っている英語でかなりの話が理解できたのだ。完全な英語ではないのだが、英語の変形、のようなものにおもえた。

- - 英語圏の国に生まれ変わったのかな。

そんなことを思っている。

生まれて数か月で、目の焦点すら合わない子供の脳のどこに、英語の知識を含めた前世の記憶があるかなどは、あまり考えないことにしよう。

「マーマヤちゃんどうしたの、今度は難しい顔してしてるわねー。おしっこかな？」

少し考え込んでると、母が私を抱き上げて、顔を覗き込んできた。そうすると不思議なもので、自然に心が浮き立ち、顔には笑みが浮かぶ。私は喜声を上げながら、覗き込んでる母に手を伸ばし、届いた母の肩をつかんで引き寄せようとしたりしていた。

前世で50年生き、今も前世と同じ思考力を持っていると思うのだが、感情や反射や本能なんかは、どうも今世の年齢に引きずられるようだ。そうじゃなければ、飢えてしまったかもしれないから、助かる。精神年齢50のままだと、母のおっぱい求めて泣くのは死ぬほど恥ずかしかったことだろう。しかもその母は前世に残した娘とそう変わらない年齢に見えるのだし。

「よーしよし、マーマヤちゃんいい子ねえ」

母は上機嫌で私をあやしてくれる。時折顔を覗き込みながら、全身で揺らしてくれるのだ。すっかりと守られている実感があり、大変気持ちがいい。

母の腕の中で揺れていると、ゆっくりと眠気がやってくる。私は眠気に逆らうことはせず、母の胸の鼓動を心地よく聞きながら意識を手放した。

- - 大きくなったら日本に行つて、自分の子供たちに会うのもいいかも。

なんてことを夢想していた気がする。

2歳の誕生日を迎えるころにはもう、日本に帰つたり、あわよくば、娘たちに会おうなんて希望は捨ててしまった。この世界の世界地図に、日本がなかったのだ。なかったのは日本だけではない。私が見たのは、見たこともない形の大陸のみが描かれていて、赤道も極地も描かれていない、何とも不完全な地図だった。

話してる言葉が英語に似てるのだから、地球の未来なのかもという期待も、その地図で吹っ飛んだ。明らかに地球じゃない、それに地図の出来を考えると、明らかに文明レベルが低いのだ。

そして何より、この世界には魔法があった。

私の父は魔法の才能を持っていて、その力で宮廷魔術師の地位についていた。……どうやらこの国は王政らしい。父は普段あまり魔法を濫用しない人の様なのだが、たまに私を魔法で宙に浮かべてあやしてくれる。下に何も無い空間にふわふわ浮かんでいるというのは、最初は生きた心地がしなかったものだ。せめてゆりかごに乗せてほしかった。

それはともかく、その時にはつきり悟つたのだ。どうやら、ファンタジーな世界に紛れ込んだようだ、と。

また、たまに父は、王宮で王族がたに各国の話をする吟遊詩人な

どを、家に連れて帰ってきて泊めてやることがあった。詩人たちの語る世界の話は、とんだおとぎ話だった。竜が空を舞い、妖精や鬼が森や山には棲んでいるらしい。そして、魔法で強化され、魔獣や魔物になった生き物たちを狩り、人間の版図を守ったり、皮や爪を採取して町で売るハンターと呼ばれる人々もいるらしい。

前世で息子がやっていた、ロールプレイングゲームってのを思い出した。50年間の前世の経験は、この生では役に立ってくれんだろうか……

「おとうたま、あたくち、くくがほちいでちゅ」

あ、噛んだ。ただしくは、お父様、私靴が欲しいです、です。ただ上手く舌が回らず、どうしても舌足らずな話し方になってしまっ

前世と同じ様に、こちらの世界にも誕生日を祝う風習があるようだ。私の2歳の誕生日の今日は宮廷魔術師である父も、なんとまる一日、休暇を取って祝ってくれている。そんなことで良いのだろうか、ちよつと心配になる。そして、お祝いにプレゼントをくれるという。

「マーヤは、誕生日プレゼントに、なにがほしいかな？」

我が家のリビングのソファーに、ちよこんと座った私の前で、栗色の髪に、緑色の瞳の童顔の青年がしゃがみこみ、私に視線を合わせるようにして尋ねてくる。子煩悩な我が父、宮廷魔術師にして準男爵の、カイル＝アストリウスだ。準男爵というのは、20代半ばで宮廷魔術師に召された時に賜った、一代限りの爵位だそうだ。

あ、歳といえば、この世界での一年は350日と、年によって何日か日数が足されて350〜360日になる。1日の長さは、測りようがなくてわからないのだが、なんと24時間、60分、60秒と、数え方が一緒だった。1秒が感覚的に変わらないので、大きな差はないのかもしれない。言葉が英語の変形のようなものであったり、私の前世の地球とこの世界は、絶対に何らかの関係があるのだろう。

それはともかく、誕生日プレゼントに何かほしいかを、なぜか誕

生日の当日に聞かれた私は、家の外に履いて出るための靴をお願いした。私の住むあたりの文化は西洋の中世に似たものを持っているので、もちろん家の中でも靴を履くのが普通だ。現に私も靴を履いて、家の中は歩き回っている。しかし、その靴は、絨毯の敷いてある家の中で歩く分には問題ないが、地面の上を歩くとすると、やわらかすぎて心もとないものなのだ。どうも過保護な両親が外に出すのを渋っているようだ。

「マーヤちゃん、すごいわぁ賢いわぁ、ちゃんとお願いできるのね。なんてかわいいんでしょ」

親ばか発言の主は母である。これはお願いした内容に対する評価じゃなく、二歳の誕生日を迎える娘が、何がほしいかを自分で考えて、言葉にしたことが嬉しかったようだ。父の前にすわっていた私を、横から抱き上げて、頬ずりをしてくれる。くすぐったくて、くすくす笑うと、それがまた嬉しかったらしく、力を込めて、しかしふんわりと抱きしめてくれる。やわらかく、暖かくて気持ちがいい。その、幸せな感触を堪能していると、母が耳元で言う。

「でもね、マーヤちゃん、まだ一人でお外に行くのは早いと思うの。外の地面は堅いから、転ぶとすごく痛いよ。もうちょっと大きくなってからにしましょうね。」

親ばかでも、外の散歩は簡単には許してくれないようだ。これは今回はあきらめることにしよう。しかし外に履いていける靴がほしいことは、強く言っておいたほうがいいだろう。ちよっと悲しげに言ってみる。

「でも、おしょとで歩きたいのでちゅ。おかあまと一緒に歩きたいでしゅ」

しまった、やりすぎたか。2歳児のやる交渉事ではないような気がしてきた。両親におかしな子だと不安を抱いてほしくない。

しかしそれは杞憂だったようだ。母は一瞬きよんとして、そのあと目を潤ませて、感激したように抱きしめる腕に力をこめてきた。少し苦しい。

「あなた、庭にやわらかい芝生をはりましょう。明日にでも。ルイ商会の方も呼んでもらえますか」

どうやら「一緒に歩きたい」に反応して、2歳の子供らしくない交渉方法は、母の気には止まらなかったようだ。母の眼がキラキラと光って見える。ちなみにルイ商会というのは我が家に入りの商会の一つで服飾系が強いようだ。芝生は、転倒時の怪我防止なのだろう。少し過保護な気がするが、そこは譲歩するところなのだろう。芝生の養生にかかる値段を2歳児が気にするのは不自然だろうし。ここでは、すこし身じろぎをして、腕の力を緩めてもらうだけにした。

「じゃあ、お母さんからのプレゼントは、芝生と靴に決まりだね。じゃあ次はお父さんのプレゼントだ。実はもう、どんなプレゼントにするか決めてあるんだ。気に入ってくれるとうれしいな」

おや、両親からそれぞれもらえるとは。そんなに子供を甘やかしてどうするんだ。

「あたくちはどちかひとちゆで、いいでしゆよ。」

とっさに言ってしまった。私はどっちか一つでいいですよ、とおうとしていることを察してほしい。しかしこれも子供らしくない

発言だったか。親からの誕生日プレゼントに遠慮をする2歳児というのは如何なものだろうか。私が2歳児は似つかわしくない反省をしていると、父が答えている。

「でも、もう用意してしまってるんだ。お父さんとお母さんで決めてたんだよ、マーマヤがほしがるものと、マーマヤにあげたいものを一つずつあげようって。それに、このプレゼントは父や母、おまえのおじい様やおばあ様にも手伝ってもらっているんだ、あのひとたちの気持ちと一緒に受け取って欲しいな」

そう言われてしまうと、うけとらないわけには行かない。この場合の祖父母というのは、辺境に住む父方の祖父母のことだろう。魔物が出るといわれる森のそばにすんで、そこでしか取れないような材料を使った薬などをつくっているらしい。父が準男爵ということ、つまり出身は平民、その実辺境の民であり、宮廷勤めには爵位くらいは必要だろうということ、国王直々に頂いたらしい。祖母は王都の華やかな暮らしを嫌ってか、辺境から離れようとしらないらしい。その、遠方に住む祖父母が、孫に誕生日プレゼントを送りたいというのであれば、これはちよつと断れない。

しかし、父のこの説得の仕方は、誕生日を迎えたばかりの二歳児相手にするものではないだろうと思う。頭ごなしに決めつけるということをしないのはありがたいのだが。

父も母も、私が子供らしくないということには、もう気づいているということなのだろう。そのことを残念に思っていないければいいのだが。それに、だとすれば少なくとも母相手には子供の手管は通じないかも。いや、先ほどの反応見る限りは大丈夫か。

……そんな取り留めもない思考にとらわれている間に、話が進ん

でしまっていた。

「サーヤ、私はあれをとってくるよ。」

父は母にそう告げて、リビングを出て行った。サーヤというのは母の名だ。誕生日プレゼントとやらは書斎にでも置いてあるのだから。あんまり大げさなものでなければいいのだが。

2・(後書き)

ちよこまかと誤字など修正しています。
感想を頂けるとおありがとうございます。

(10/27) あれこれ修正。

投稿する前に読み直さないと・・・

「おかあたま、おとうたまの用意しているものって、どんなのでちゅか」

父がリビングから出て行った後、私は好奇心が抑えられなくなつた。私を抱きかかえたままの母に、プレゼントの内容を尋ねてしまふ。大人がやればマナー違反で眉をひそめられる行為だ。

最近、感情だけではなく、思考や行動も少しずつ子供じみてきている気がする。退化なのか、順応なのか、気になるところだ。

「マーヤちゃん駄目よ、そんなの先に聞いたら楽しみが減っちゃうわ。お父さんもお母さんも、あなたのびっくりする顔が見たいんだから」

にこにこ笑いながら、優しい声でダメ出しされた。やっぱりマナー違反なのだが、2歳の子供のちよつとしたマナー違反を深刻に叱る親はあまりいない。とはいえ、自省していたこともあり、反射的に謝罪の言葉が出て来る。

「ごめんなしゃい…」

少し沈んだ声になった。それを聞いた母は、またもにこにここと笑って頬ずりをしてくれる。まあなんて可愛いんでしょう、なんてつぶやいている

などと、母娘のコミュニケーションを深めていると、父が帰ってきた。大事そうに両手で持っているのは、木製の箱のようなもの。

大きさは高校生のお弁当箱くらい、こちらの世界なら文箱と同じくらいだよ。

父はリビングのテーブルの上を片付けて、箱と一緒に持ってきたらしい大きな紙を広げていきながら、説明してくれた。

「マーヤへのプレゼントは魔法の守護者だよ。まずはマーヤの魔法の適正を観ようね」

そう言えばこの世界には魔法が存在するんだ。日頃から片鱗は目にしているが、普段の生活にすっかり馴染んでいて忘れそうになる。灯りや水洗トイレは、魔法であっても利便性は変わらない。

「しゅごしゃ？てきせい？」

「マーヤの得意な魔法を調べるんだ。そしてその魔法を助けてくれる精霊を、守護者として精霊の世界から喚ぶんだよ」

「あたくちのまほう？」

宮廷魔術師なんてものをやってる父をもつから、魔法を使っても不思議はないのかも知れないが、自分で魔法を使うことは考えもしなかった。

「お父さんも使えるし、お母さんもお花とか咲かせるの、上手なのよ。お母さんの守護者はこの子たち。」

母がそう言うと、そのまわりにたくさんのひらひらしたものが、とび回り始めた。色とりどりで何だか幻想的である。魔法で喚ばれた精霊だから幻想的で当たり前なのだが。

それにしても、いままで母の守護者に気づかないはずだ。どうみても蝶なのだ。母の周りを飛んでいるのを見ていたとしても、それが魔法だとか思わなかっただろう。

「お母さんは植物を育てる魔法が得意なんだよ。お母さんの守護者は受粉を助けてくれるんだ」

父が、補足するように言うが、2歳児への説明としては不適切ではないだろうか。

それはともかく、気になるのは父の魔力だ。期待を込めてじっとみる。

すると父は言いづらそうに口を開く。

「あー、お父さんの魔法は家の中とか町の中で使うのには、ちょっと向いてないんだ」

剣呑なことを言う。宮廷魔術師というくらいだから、なにか凄いことが出来るのかもしれない。とはいえ、今はそれは後で良い。もっとも身近にいる母が操った魔法。実際は自分の守護精霊を呼んだだけなのだが、にすっかり心を奪われていて、自分がどんな魔法を持つてるのか、というのにわくわくしている。

「おとうさま、あたくちのまほーは？」

「あ、そうだな。」

父は、自分の守護者を見せるとせがまれ無かったのに、ほっとしたようだった。

「守護者を喚ぶのは、魔法の適正を調べる効率良いやり方なんだ、マーマのおじいちゃんと僕とで発見したんだよ。この魔法陣は王宮の書庫で見つけた、人を好きな精霊を喚ぶ魔法陣で、喚んだ聖霊はこの精霊石の力で、マーマの近くにいられるようにするんだ」

どうやら、我が一族のオリジナルの魔法のようだ。父は説明しながら先ほど広げた紙の真ん中に箱から取り出した、青白く透き通った石のようなものをおいた。これが精霊石なのだろう。

「おじいさんが、辺境の森で見つけたんだよ。本当はマーマにはまだ早いと思うんだけど、折角大きくて質のいい精霊石が手に入ったからって誕生日プレゼントに送ってくれたんだよ」

「マーマちゃん、今日だめでも気にしちゃ駄目よ？何回でも試せるんですからね。」

始めるまえから父母が牽制しているが、2歳の誕生日の娘は、その気遣いを普通は理解できないのではないだろうか。

ともかく、魔法陣を眺めて見る。

……ラテン語？

前世の最期の半年、退屈をまぎらわすためと、なにかなんのやくにもたたないことをしてやろうという、意地だけで、勉強した言葉が魔法陣にかかっていた。

「ラブレター？」

書かれている内容におどろいて、思わず呟く。

「マアヤ、何で判るんだい、もうだれも読めない古代文明の言葉なのに…」

「え、なんとなくしょんなかんじ…」

父の追及に上手くかわせなくて、焦つてどもる。

「なんとなく、か。凄いな。素質なのかも。これは、精霊に愛を訴えかけて、受け入れてくれる精霊をよぶものだよ」

…私が読む限り、もっと永続的な、最後通告のようなプロポーズなのだが。

「じゃあ始めるよ、精霊と一緒にいたいって願うんだ。」

…もう始めるの、心の準備がまだなんですが!?

魔法陣に並ぶ愛の言葉が気恥ずかしくて、私は同じ位に強い思い、生涯の友誼を念じた。

部屋のなかに、なにやら濃密な気配が満ちる。息苦しく感じるほどのそれは、しかしつかの間で、消え去り、魔法陣と精霊石だけが残されている。

「失敗?でも、マアヤには治癒の力をはっきり感じたぞ、それにあの、濃い気配…」

どうやら、魔法の種類は判ったが、守護者は喚べなかった、というところか。にしても前世で看護師だった私の魔法が、治癒だというのは運命の皮肉か、なにかの差配なのか。

突然、精霊石が輝きだした。部屋が白くなる程の明るさなのに、不思議に目に優しい光だ。

その光が消えた後に、精霊石の隣には小さな人影が立っていた。

「妖精…？」

まるで、地球の御伽噺に出て来るような、妖精だった。掌に乗りそうな小さな体に、体と同じくらいの大きさの羽根、カゲロウの物と、そっくりだ。

ただし、その妖精は看護師の白衣いわゆるナース服を着ていたのだが。

4・(スリヤ)

それは、奇妙で独善的で、押しつけがましい詠だった。

あなたは今どこにいるのですか
わたしは今ここにいます

あなたが遙か宇宙の彼方にいても
あなたが深き深海の底にいても
あなたをもとめるこの声を届けましょう

知ってください、あなたを愛する者のことを
知ってください、あなたが愛する者のことを
あなたを喚ぶものがここにいます。

愛を鎖にしてあなたをしばり、
鎖は愛となって私をからめ捕るでしょう
鎖が二人をつなぎ合わせるでしょう

滅びが分かつ時まで

スリヤは退屈していた。精霊界に生を受けて100年が経つが、
ここ何十年と何も面白いことが無い。地上を眺めて暮らすのにも飽
きていた。

もしこのまま、何事もなく時が過ぎていけば、彼女自身が悪鬼と化して、地上に騒乱を起こしていたかもしれない。このまま、何も面白いことがなかったなら。ふいに、奇妙な喚び声が聞こえてくる。魔力の波動に乗ってくるその声は、うつとおしい、愛情の押しつけのような言葉なのに、感じる魔力は妙に純粹なのだ。

最初、スリヤはちょっと興味を持っただけだった。これは人間が精霊を呼ぶ声だ、契約を求める声だとわかったから。スリヤは契約する気などない。人間との契約はたいてい詰まらない。ちょっと見てみようと思つたのだ。この声の元はどんな奴なんだろうと。そしてどんな精霊が契約するんだろうかと。

声の元は人間の王都の小さな屋敷にあった。そこに近づいていくと、仲間の精霊の気配が驚くほど濃密だ。あの声にひかれてやってきたものが非常に大勢いるのだろう。ただ、スリヤ以外はみな、まだ彼女に比べれば生まれたばかりとっていい連中で、言葉を解するレベルに達しているものは全くなかった。意味がわかって、あの詠の元をたどるようなもの好きは彼女だけなのだろう。

酔狂なのは私だけってことか

彼女は自嘲気味に苦笑した。その苦笑が、何かの引き金を引いたのか、群がっていた精霊の一部が彼女の存在に気付いてしまった。年若い精霊たちにとって、彼女の存在は強大で、畏怖を抱かせる。気付いた精霊は、たちまち逃げるように姿を消し、それに気づいた他の精霊たちも一斉に消えていった。

おや、悪いことをしちゃったかな。まあしょうがないね。ちよっと召喚主の顔だけでもみて、私も退散することにしようかな。

そう思いながら、屋根をすりぬけて、屋敷のなかへ入り、召喚の魔法陣をみつけた。

ほう、変な詠がはいってるわりには、結構良い魔法陣じゃないか。これは術者も期待出来るねえ。……おや、なんだい魔法陣は借り物かい。

スリヤは、魔法陣が書かれたときの魔法の波動と、自分が惹かれてやってきた魔法の気配が異なるもので有ることに失望した。自分で満足に魔法陣も書けないのにつられたとは、と思いながらも、魔法陣と同じ魔法の気配が近くにいることにも気づく。

なるほどね、魔法使いの親が、自前の魔法陣で子供に守護者を付けようとしたってところか。うん、なかなかいい質の波動を持つてる。ま、うでは悪くないんだらうけど、あの詠の魔法陣で寄ってくるのは、意味の分からない小物ばかりだと思うがね。っと、こちがあの波動出してた子供か。おやあ、小さいねえまだ2歳ってところじゃないか。にしてはしっかりと安定した波動だったけど……

その時、父親らしき魔法使いがつぶやいた。

「失敗？でも、マーマには治癒の力をはっきり感じたぞ、それにあの、濃い気配……」

スリヤは実体化せずにいるため、魔術師であるカイルも存在を感じできないでいる。

おや、この子の魔法の力は治癒なのか。なかなか珍しいじゃないか。それにこの感じ、ただのお子様じゃなさそうだね。ちょっと挨拶してやるか。

スリヤは、実体化して姿を現すことにした。彼女のお気に入りの姿は、若い人間の女性に美しいカゲロウの羽根をつけたものだ。この姿は非常に人間に受けがいいのだ。そして、治癒魔法ということ、悪戯心を出した。古代文明の記録にある、治癒者の服装をしたのだ。もちろん、この場にいる人間がそれを知っていることなど、期待していない。

何の合図もせずに出るのも失礼だろうと、これも悪戯心で部屋いっぱい光を出してから実体化する。部屋の中にはびっくりした顔の人間が3人。一人は魔術師。そしてその妻らしき女性。そして、その女性に抱きかかえられながらもこちらを眺める、小さな子供。呼び出した魔法の主だ。そしてその子供がつぶやいた言葉に、今度はスリヤが驚くことになる。

「ナースの、はくい……？」

なんでわかるんだい？この衣装は古代文明が滅んだ時に消えたもんだよ？

「なんだか変な子だねえ。こんにちは、お邪魔するよ、人間のみなさん」

問い質すのは挨拶してからでも遅くはないからね。

魔術師であるカイルは、どうにか最初に言葉を発する程度に落ち着いていた。丁寧に話しかけるように気を付けて、口を開くことにする。言葉を話す精霊は、非常に大きな力を持つことが多く、下手な扱いをして激発されたら抑えるには宮廷魔術師の総力が必要になる。

「ご機嫌いかがですか、上級精霊の方。言葉をお話になるほどの方を御喚び出来るような魔法陣ではないはずなのですが、もしかし

て何か御用でしょうか」

スリヤが上級精霊であることを理解し、あの魔法陣がそんな存在を喚ぶことができないことを知っていたことに、スリヤは感心した。

「なかなか見る目があるじゃないか。あのひどい詠を書いた本人だとは思えないね。」

カイルがうるたえながら応えを返す。

「あれは、精霊に愛を訴えかけて、受け入れてくれる精霊をよぶものだと伝えられているのですが……もしや間違っているのでしょうか。」

「ふふ、ああ、ひどいもんだよ。ちょっと耳をふさぎたくなる」

スリヤが残酷な答えを返すと、カイルはますますうるたえてしま

う。

「しかし、私も妻もあれで守護者を喚んでいるのですが」

「あれで、きちんと守護者が呼べたのは、あんたらの魔法の波動がなかなか魅力的だったからだろうね。あの詠はなんとというか、思いが暴走した人間の妄言を並べたものにしか思えなかったよ。そのおかげで、単純にあんたらの波動に惹かれるだけの、若い精霊が喚べたんだろう。意味が分かる連中は気持ち悪くて寄ってこないさ。」

そういうと、へこみ始めた魔術師に精霊を呼ぶのに特別な言語は必要なく日常語でも大丈夫だ、なんてことを教えてやる。そしてその傍ら、意識を子供に向ける。

『なんで私の着てる服のこと、知ってるんだい、お嬢ちゃん』

念話を受けたのは初めてなのだろう、その子は目を白黒させながら、それでも同じように心の中で念じて返事を返してきた。

『あなた、だれ……？』

『ほう、念話で返すとはね。私はあんたの正面にいる精霊だよ。』
『妖精さん？』

妖精、とつぶやいた子供の心の中に、今のスリヤと同じような格好をしたものたちが、空に舞う映像が浮かんだことを感じ、スリヤは驚く。

『私のようなものに、以前あったことがあるのか？』

『いいえ。昔、本で読んだだけ。』

『本で？そんな本がお嬢ちゃんの読める範囲にあるなんて不思議だな。この服を知っていたり、私の格好と同じものを見たことがあるようだし、なかなか面白い。おまえ、いったい何者だ？』

『えーと、マーヤよ。マーヤ・アストリウス』

『ふーん。こんな時にとっさに名前をいってごまかすとは、まったく驚くべき子供だ。2歳なんだから。ま、それだけ頭がいいと、いきなりは私のことも信用は出来んだろうな。』

マーヤとの念話の傍らに続けていた、カイルとの会話は、「あとは自分で考えろ」で切り上げた。そして、声に出して宣言する。

「こっちのお嬢ちゃん、マーヤは気に入った。私がしばらく遊び相手になってやるわ」

マーヤが驚く。念話ではそんなに友好的じゃなかったのだ。

「あそび、あいて・・・？でも、おなまえもしらない・・・」

ようやく、そうとだけ抗弁する。

「おつと失礼した、私のことはスリヤと呼んでくれ。どこでも呼ばわかるようにあとで印をつけよう」

マーヤは不安そうに魔法陣の文字を眺めながら、確認する。

「えと、お友達になるってこと？」

「ああ、お友達だ。その魔方陣の束縛は受けてないから、一生というわけではないが、とりあえずは私が飽きるまでは、お友達だ」

不遜な物言いの自称友達に、マーヤにつこり笑っていった。魔法で縛ったお友達なんてまっぴらだし、出会ってすぐに一生一緒にいるなんて決断はできるものじゃない。相手が母の守護者のような物言わぬ精霊ならともかく、おしゃべりする精霊にたいしてだとちよつと失礼な気がしてくる。

「うん。じゃあよろしくね、スリヤ」

「ああ、よろしくな、マーヤ」

スリヤは再度カイルのほうを向いて言う。

「マーヤの守護者は、まだ選ばないように。私が見極めてあげる。」

そしてまた、マーヤに向き直り、サーヤが抱くマーヤを腕の中に受け取って、頭頂部に口づけをする。

「これで印はついた。お前がどこにいても私にはわかるから、会いたくなったら呼んでおくれ、マーヤ。」

そしてマーヤをサーヤに返すと、

「また来るよ」

と、いって姿を消した。

4・(スリヤ)(後書き)

スリヤの言葉使いがちょっとブレてたので修正&細かい描写に手を入れました。

誕生日の翌日、我が家は朝から大忙しになった。普段は交代に通いで来てもらってるメイドさんが、二人とも朝からそろっている。

我が家は、いまは爵位を持つとはいえ、父はもともと平民で、商人の娘である母も普段から家事を行う。だから住込みのメイドさんなどはいない。小さいなりに屋敷といえる家に住んでいるため、定期的な掃除などを手伝ってもらうために、交代で来てもらっている。

今日に限って二人とも来てもらっているのは、私の祖母のための部屋を用意するためだ。

昨日、精霊のスリヤが去った後、父と母とが全然別の行動をとり始めた。

母は悩みを声に出していた。

「マーヤちゃんは、治癒の魔法が適正なのね。じゃあどうしましょ、治癒の魔法って使い手の方がなかないなくて、教えてくれる人を探すのも大変だわ。でも折角だし、こんなに早く魔法の適性がわかることなんてないんだから、誰かに教わったほうがいいわ……」

母は、何やら私の魔法教育を本格的に始めるつもりのようなのだ。治癒魔法が珍しいということもあるのだろうが、おそらく守護者を喚ぶ魔法が、あんな形で失敗したので、シヨックを受けてるのではないだろうか。もしくは私のシヨックを和らげようとしているのかもしれない。私としてはあの詠でよばれて、無理やりな友情を結ばれるより、スリヤと良い関係を築いたほうが有益だと思っただが。

一方父は、何やらつぶやいていた。

「言語は何でもいい、だなんて。そんな馬鹿な……じゃあ、なんのために魔法文字を使ってるんだ。」……エウレニア語で魔法陣を書いてみるか……」「いやそれだと何の魔法が誰でもわかる……」「……あ、別にかまわないのか……のような用途なら……」

よっぽどスリヤに聞かされたことが応えているようだった。魔法文字というのはラテン語のことだと思う。エウレニア語というのは私たちが普段使っている英語もどきの言語のことだ。ちなみに私が住む国の名前はフランク王国というらしいので、エウレニア語というのは他の国も使っている言語なのかもしれない。

「あなた、カイル、そんなことよりマーヤちゃんの先生を探しましょう」

母が父におだやかに声をかける。

「……待てよ、魔法陣を2重にして魔法文字とエウレニア語で複数の意味を持たせれば……」

父は母の声が入っていないようだ。よくあることだが、大抵この後は、あまりいい状況にはならない。母は抱いていた私を、おもむろにソファアに座らせてから、一度大きく息を吸い込んで、怒鳴る。

「あなたっ！カイルッ！」「誰もが使うような……」

ああ、母のまなじりが上がっていくのが見える。なんでこの声が無視できるのだろう。

「……あなた」

「こんどは一転、つぶやき程度の、平坦で乾いた声で呼ぶ。

「おおお、なんだサーヤ。あああ、マーヤの先生役なら母に頼めばいいだろう。」

大きな声で怒鳴っていても聞いてくれないのに、小さく、平坦な声で囁くと驚くほど素早くて確かな回答が返ってくる。……前世の私も同じような経験が何度もある。どこの世界でも、夫というのは何故こうも度し難いのだろうか。

「お義母様は辺境に住んでらっしゃって出てこないじゃないの。まさか、マーヤを辺境にやるなんて言わないわよね。」

母の声が平板なままだ。前世の娘と同じ世代なのだが、今の私にとってはやはり母なのである。怒れる母は心臓に悪い。思わず母に加勢する。

「おとうさま、とおくへいくのはやでしゅ」

女は 団結するものなのだ。

「ほらごらんなさい！あなたもまじめに考えてください」

母の声がちょっと明るくなった。娘が加勢する母親というのは非常に強気になる。これもまた度し難いかもしれない。

「いや、母に来てもらうようにするから、大丈夫だよ。明日にでも用意しよう」

その時は父が母の怒りをそらすための逃げの手を打ったのだと思つた。母も疑わしそうに父を見ていたが、怒鳴って気が晴れたのか、それとも私が味方に付いたことで溜飲が下がったのか、それ以上の追及はなくなつた。

父は辺境の祖父母の家に遠話で何やら話した後、すぐに祖母の部屋の準備のための手配をした。二人のメイドさんをお願いするだけだが、それが終わると、ほっとしたようにいそいそと書斎に籠りに行つた。エウレニア語の魔法陣を試していたのだろう。

そして、あけて今日、私に魔法を教えるために、我が家に来る祖母を迎える部屋の準備に家中が大わらわなのである。祖母の部屋は、二階の北側の部屋になつた。

「お年寄りに二階の北側って、ご主人は何をお考えなのかしら」
部屋のなかのさまざまなものを取り除いている間、私の面倒を見てくれることになつたメイドのミラさんが不思議そうにつぶやいている。私に聞かせようとしたのではなく、ただ口に出さずには居れなかつただけなんだろうと思う。私も同じことを思っていた。その部屋は、普段使われない部屋で、物置代わりになつていたので、丁度良いと言えば良いのだが、日当たりを考えに入れていいのだろうか。祖母はまだ50歳で足腰もしっかりしているのだが、だからと言って二階に部屋を作るのは非常識じゃないのだろうか。それとも魔法で何とかするのだろうか。などといろいろと疑問に思っていたのだ。

とはいえ、父はともかく、そういうことに気が利くほうの母も納得して作業しているようなので、口は出さずにいた。

やがて、物置状態だった部屋が、気持のよいリビングのようになり、ひと組のソファアが運び込まれて、作業を終えた。昼食は、労働をねぎらうように、メイドさんの二人も一緒に食卓に付いた。貴族の食卓で使用人が同じテーブルを囲むことはないらしく、二人とも恐縮していたのだが、父や母がそんなことに頓着するはずもなく、母の手作りの料理を並べて一緒に昼食となった。

昼食後、手伝ってもらった二人にお礼を言って帰ってもらおうと、父が私を抱き上げて二階へ上っていく。祖母の部屋に行くのだろうか、何の用事だろうか、と疑問に感じていると。

「じゃあお母さんをここに呼びましょうか。」

父が宣言し、祖母の部屋に魔法陣を広げ始めた。

……今から、ですか？

5・(後書き)

短めです。

中途半端なところで区切って申し訳ないです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9438x/>

肝っ玉お嬢様奮闘記

2011年11月2日10時02分発行